

平安・鎌倉時代文学の出産

——母子・祖父と政治

文学研究科博士後期課程

北條 暁子

目次

凡例	．．．．．	iii
I 序章	本研究の背景、目的と意義、構成、概要——出産・死別の描写が文学にもたらすもの	．．．．．一
II 出産の部		
第一編 平安時代前・後期（摂関期）		
第一章	誕生を慶ぶ時——『紫式部日記』御産叙述再考	．．．．．一三
第二章	後産までの久しさ——『枕草子』『権記』を手がかりに	．．．．．五五
第三章	臍の緒を切る父——古本『夜の寢覚』再読	．．．．．八三
第二編 平安時代末期（院政期）		
第四章	臍の緒を切る母——『古事談』待賢門院璋子への評価再考	．．．．．一〇〇
第五章	誕生を祝う祖父——後白河院の御幸に見る皇統意識	．．．．．一二八
第三編 鎌倉時代（院政期）		
第六章	後深草院二条の御産と亡父——介助と家意識	．．．．．一五三
第七章	速報としての飢落とし描写——『平家物語』御産巻、『とはずがたり』	．．．．．一六七

第八章	後嵯峨院と両統迭立——院の死と二条の「虚構」	・ ・ ・ ・ ・	一七九
III	死別の部		
第四編	平安く鎌倉時代の死と和歌文学		
第九章	帝による亡魂探訪——『後撰集』「いづこをはかと」(上)	・ ・ ・ ・ ・	一九九
	(下)	・ ・ ・ ・ ・	二二〇
IV	終章に代えて 出産・死別を『とはすがたり』する力と「琵琶行」	・ ・ ・ ・ ・	二五三
初出一覧	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	一
あとがき——今後の課題と見通し、謝辞	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・	2

5年以内に出版予定である

論文要旨

令和 5 年 12 月 4 日 (訂)

研究科・専攻・課程	氏 名	論 文 題 目
文学・国文学・博士 後期	北 條 暁 子	平安・鎌倉時代文学の出産 ——母子・祖父と政治

本論文は、平安・鎌倉時代文学に見られる出産・誕生描写を対象として、歴史記録類から明らかにする御産の儀礼や慣習などの当時の実態と突き合わせることによって、政治的意味合いをも踏まえた作品の解釈を行ない、その内容・表現の持つ意義などについて考察したものである。また、出産の対になるものとしての死別についても、『長恨歌』摂取による帝の亡魂探訪の和歌の考察を行い、その文学史的意義について論じている。

「Ⅰ 序章」においては、「出産・誕生・死別の描写が文学にもたらすもの」として、本研究の背景、目的と意義を論じ、構成を示している。

「Ⅱ 出産の部」は本論文の中核を為す。文学における出産・誕生描写について時代順に、「平安時代前・後期（摂関期）」（第一編）、「平安時代末期（院政期）」（第二編）、「鎌倉時代（院政期）」（第三編）と区分した上で、第一編では『紫式部日記』、『枕草子』、『うつほ物語』、『夜の寝覚』を、第二編では『古事談』、『平家物語』、『頼政集』を、第三編では『平家物語』、『とはずがたり』を取り上げ論じている。具体的内容は以下の通りである。

「第一編 第一章 誕生を慶ぶ時——『紫式部日記』御産叙述再考」

先行研究は、『紫式部日記』の山場たる中宮藤原彰子の出産場面について、時間の流れを無視して重要な事柄を先取りして述べたあと、時間を遡って繰り返す強調表現と見做した。この通説は紫式部の筆致として『源氏物語』の読解にも五十年以上適用された。しかし、『医心方』等の医書・古記録の分析により、誕生直後は性別を伏せたこと、後産完了後に誕生と性別の公表が行われる事例が多いことが判明する。つまり、『紫式部日記』の三度の描写について、時間を無視しているとする評価は誤りであって、時間の経過通りに実況中継のごとく、子の娩出、後産完了、性別公表の瞬間を描き留めている。すなわち、時間の経過に沿った臨場感にあふれた筆致で描かれており、紫式部の筆法全般への評価にも関わる事例であると指摘する。

「第一編 第二章 後産までの久しさ——『枕草子』『権記』を手がかりに」

古典文学の後産（胎盤娩出）関連描写について、関連史料を指摘して読み解く。『枕草子』「心もとなきもの」の「子生みたる後の事の久しき」はどれほどの時間か。現代の医学書をもとに先行研究が「一時間以内」と数値化したのが、明治以前には一日以上の遅れも見られ、時間の目安の無い心

情的な久しさと読むべきであるとする。併せて、『うつほ物語』で後産完了後に臍の緒を切るとするのは当時の慣習ではないかとした先行研究の推測の正しさを証明する。

「第一編 第三章 臍の緒を切る父——古本『夜の寝覚』再読」

臍の緒を切るのは新生児の父が本来である、とする新説には賛否両論がある。原作『夜の寝覚』の先行研究は新説を退けたが、論拠に史料の誤読が認められ、新説が妥当である。旧説に則って特異な行動を取ったと見做されてきた父は、新説に則り、子の一生を後見する立場を表明したと読み改められる。この結論は、作品中の登場人物らの示す好意的な反応とも相応する。そして、父としてのありふれた対応が殊更に記述されるのは、これまで誕生した寝覚の上所生の子に対しては父と名乗れなかったが、ようやく父として振る舞えたという対比を明確に示すためと結論する。

「第二編 第四章 臍の緒を切る母——『古事談』と璋子への評価再考」

鳥羽天皇の中宮璋子は、崇徳や後白河の誕生した御産において、自身が臍の緒を切った。臍の緒切り担当者は本来新生児の父であるが、父が天皇の場合触穢を避けるため、母の後見人が切るものであった。出産した母后本人による臍の緒切りは中宮璋子が初例であり、先行研究はこの異例を、璋子の気質や『古事談』の叔父子説と関連付けた。しかし、綿密な計画のもとに実施される儀礼は個人の意志を反映しにくい。璋子による御産時の異例は、むしろ摂関期と院政期の御産の性格の相違として評価し直せる。すなわち、上皇が皇子にとって「双方」の尊属となり得たことの端的な表れであり、その意味で、院政を象徴する事象と理解するのが適切であるとする。

「第二編 第五章 誕生を祝う祖父——記されない後白河院御幸」

安徳の誕生は、祖父後白河院にとって望ましからぬものであったのか。『平家物語』理解への大きな鍵として、諸本のうち一本のみに描かれる安徳誕生四日目の御産所への後白河院の御幸を考察した。この御幸は、鳥羽誕生時の祖父白河院による「康和例」を先例とする。先例の選択から、白河一堀河一鳥羽 という正統に後白河一高倉一安徳を重ね合わせ、かつ、鳥羽と後白河との父子関係によってつないで、後白河を正統と位置付ける意図が読み取れる。誕生当時の安徳は、後白河院の皇統形成と永続のために必要とされていたと論じる。

「第三編 第六章 後深草院二条の御産と亡父——介助と家意識」

先行研究は、『とはずがたり』の描写の多くを後深草院二条のファザー・コンプレックスという「個性」に帰結させる。本稿の対象とする、皇子出産時に二条の見た「父による介助」という夢についても、先学は夫でなく父であることを特異であると看做す。しかし、古記録を分析した結果、当時の皇子女出産は、実兄による介助など男性親族を含む「家」に支えられたこと、后以外では夫である上皇の介助こそあり得ないことを確認した。二条の夢は家意識の表出と評価し直すことが妥当であるとする。

「第三編 第七章 速報としての甕落とし描写——『平家物語』御産巻、『とはずがたり』」

先行研究は『とはずがたり』の「甕落とし」描写を『平家物語』に倣ったと推測するが、文学描

写上の類似というより、当該の儀式の副次的に帯びた機能が共通していたことによる類似である。甕落としとは、後産が遅れた場合に行う呪術であり、したがって、誕生および性別の判明後、かつ、その公表前に行われた。甕落としの方向は性別によって異なるため、甕落としは性別と誕生の速報的意味合いを副次的に帯びる。『とはずがたり』『平家物語』はともに正妃による皇子誕生の期待される御産において、誕生と性別が判明した瞬間を描いているのであるとした。

「第三編 第八章 後嵯峨院と両統迭立——院の死と二条の「虚構」

『とはずがたり』の先行研究が史実として受容してきた、筆者の亡父源雅忠の任大臣に関わる作中の主張について、古記録を分析した結果、虚構と位置付け直した。ただしこの虚構は、史実に反して後嵯峨院崩御直後に後深草院政が開始された場合には実現し得た内容であり、持明院統に属する読者には正当な主張と受容され得た。先行研究は『とはずがたり』の虚構の多さをもって、同作を物語ると評してきたが、当該の虚構は『とはずがたり』の物語性ではなく、むしろ両統迭立の時代を反映した日記文学らしさを示しているとする。

「Ⅲ 死別の部」は、「第四編 平安～鎌倉時代の死と和歌文学 第九章 帝による亡魂探訪——『後撰集』「いづこをはかと」」のみからなる。具体的内容は以下の通りである。

『後撰集』藤原伊衡女詠は「墓」という語、墓参という事象を詠む和歌の嚆矢である。墓参は和歌に詠まれにくい事象であった。したがって先行研究は、醍醐帝の夢魂が伊衡女の墓を探して訪れるという仮想について、辛くも回避できた望ましからぬ内容と解釈した。しかし、『後撰集』伊衡女詠が一首の大部分を占めて表現するのは、帝による墓参という、現実により得ない特異な夢である。唯一の先例は、『白氏文集』「長恨歌」「長恨歌伝」に描かれる、玄宗皇帝による、楊貴妃の没した馬嵬への訪れである。つまり、伊衡女詠は、「長恨歌」摂取によって、魂を求めて墓を探し訪れられる永遠の愛を希望する一首であった。伊衡女詠を、死後も変わらぬ愛という概念を和歌に導入した作品と評価し、『源氏物語』に与えた影響をも指摘する。

「Ⅳ 終章に代えて」においては、「出産・死別を文学として語る力」として、「Ⅱ 出産の部」「Ⅲ 死別の部」双方で取り上げた作品である、後深草院二条の『とはずがたり』の後篇、巻四・五について論じ、描写や人物造型のみならず、『源氏物語』が文学形式として高めた「問はず語り」という構造をも『源氏』から学んだとする見通しを提示する。具体的内容は以下の通りである。

先行研究は、『とはずがたり』巻四の將軍交替や巻五の和知の描写を、新たな見聞への筆者の関心の表れと評価してきたが、「王昭君」説話という土台があって、「えびす」、「絵」等の要素が描かれたことを確認する。『とはずがたり』に王昭君説話の摂取を認めると、巻四冒頭において二条が遊女と歌を詠みかわして涙する赤坂宿は、不破関を越えて最初に宿る東国の地にあたり、巻四冒頭は昭君出塞の趣を持つと解せる。なお、昭君出塞は、『源氏物語』須磨巻に引かれる故事でもある。このように巻四冒頭に昭君出塞のみの影響を認めた場合、そぐわない要素として、遊女との深い共感の描写があり、この二条と遊女の共感、むしろ白居易の「琵琶引」における白居易と商人妻との共感と同質である。ただし、演奏される楽器の種類は「琵琶引」とも一致せず、『源氏物語』明石巻と重なる。先学が『源氏物語』明石巻について指摘する「琵琶引」摂取の要素のうち二つは、

弦楽器の演奏を経て淪落の人同士が深く心を通わせること、そして、その共感によって「自言」、つまり「(一般名詞の) 問はず語り」が可能になることである。つまり、『とはずがたり』巻四、五は、「王昭君」説話と「琵琶行」、および、それらを踏まえた『源氏物語』須磨巻、明石巻の要素を分かち持っており、いずれの趣をも摂取する。こうした様相が『とはずがたり』という作品名に反映された可能性を探り、引いては、問はず語りという文学形式と、出産や死別が文学作品に著述されることとの関わりについて考察することを今後の課題とした。

巻末には「参考文献」および「あとがき 今後の課題と見通し、謝辞」を付す。